



五升庵文集 卷一



五科菴文冊序

つひつひと文をいひぬるのきこへり  
此のえく歌よむ人なり思ひ終るる  
いよとていよとていよとていよとて  
きこよとていよとていよとていよとて  
きこよとていよとていよとていよとて



おのゝ葉のゆかりのうらみ

をよみてはなれぬ

はなれぬはなれぬ

はなれぬはなれぬ

はなれぬはなれぬ

はなれぬはなれぬ

はなれぬはなれぬ

はなれぬはなれぬ  
はなれぬはなれぬ  
はなれぬはなれぬ  
はなれぬはなれぬ

因田子萬葉集

自序

此草紙の巻入りありしは一日の間に成りしものなり  
筆よすうやういふ更あり或い人を哭きしもの文  
句あり多分記し入頭ありて塚を穿つる事ありし  
所よりありし譯ありきし一序に韓柳の理論  
書ハ後よ清書の内儀をのりしふ義ありき  
七情の色く我世の和よ書終きれしなりや

芭蕉翁入りの竹ひし一紙抄の文章よもりの  
まのうらみひきしはいふもよ草紙ありし  
よももら多しありしものもあつらひ  
けりしえし人のあししものありしもの  
きり今をむしありしものありしもの  
経典の書よも執り漢佛書の因なりし  
竹のく回向にたきりやし書ありしものありし

罷ゆりたりつゝまゝしつ草菴焼失の後ゆゝひ  
 又古とらへしむく安永午のくく冬のををり  
 廿三日丑科菴の申さのまゝしつて蝶曼書

蝶曼和尚文集卷第一

目録

- |          |         |
|----------|---------|
| 墨直一序     | 頭陀の時雨序  |
| 密結ろ色序    | 鳩ろ二巻序   |
| 鉢歌集序     | 雪の味序    |
| 手白の巻序    | 恒翹追悔集序  |
| 生来忌序     | 類題茶臼集序  |
| 冬来又草笈分集序 | 筆押集序    |
| 道入枝折序    | 百題繪巻紙序  |
| 老蓮翁茶臼集序  | 蓮門伝記語録序 |

水筆序

弘澤行母道の記序

芭蕉翁泚語集序

芭蕉翁八十四忌序

芭蕉翁九十回忌序

芭蕉翁文集序

名所小鏡序

新題題卷の集序

無子翁の集序

芭蕉翁百回忌序

口右回忌後序

青長法師追悔和歌跋

雁の羽代跋

青幣白幣跋

星明の跋

墨の白の跋

新雜沓集跋

菅菰抄跋

年改草跋

鶴立集跋

奥細道書

手濫の裏書

二見和文表裏書

古地和文表裏書

墨車一序

むしニ乗れ其伴ちれいし和様を電り墨車一と作  
らりしより蕉門うら或ちありて物うけりし  
却鄙の遠方るの春をけし孫よりのわねる来来記一  
少野の宛はの東山の墨車一と来々乎とにす  
祖あるたごのわもちう流流のまの土地よわ  
其の其さのまきん一とむちあつるまを  
人の中にも其伴百川のまみ其門入名通たり  
あつる三人うらりりやや啼涙うめい  
凡人がうらりまきん一とむちあつるまを



又世に多の陰を深くききわいの徳ありしはこゝの事あり  
塔よりれをききしとてせめて碑字より西掃の如きと  
そんは終入る師を暮夜に没せしとておのえしに  
わのききも鼻を流せしとてあやや

頭陀入時雨序

常陸五峰撰

世に旅よびく小田入りしとて生涯に親きしれ  
祖翁入内流をききしとてききしとて世よきとてや  
流計りし師をききしとて國へ行しとてききしとて探集  
傳書の傳りて夢さめしとて宿よきしとて字直しとてあやや

他と譲り自取譲りし祖徳を授けしとてまよきしとて常陸の  
三り房入りしとて煙雲入痛疾よきの事ありしとて  
内推の事ありしとて破美と持貴の門よきしとて某難知  
思し流計りしとて流計りしとて尊家入りしとて流計り  
授けしとて流計りしとて流計りしとて流計りしとて流計り  
うきしとて流計りしとて流計りしとて流計りしとて流計り  
一生の法流ありしとて年月進門入内推とて東西よ  
難題ありしとて祖徳ありしとて流計りしとて流計りし  
おの義付きしとて廟前よき書

蜜柑の色序

伊賀相原著

昔年一四月の暮春伊賀の相雨みちのうらみ  
 祖翁の喜成のよきうらみ——義忠菴の喜成入世  
 圃——美しきうらみの古くはるうらみ——きれいな  
 けのく本津のうらみ——三益の山さくらしたと馬の上野の  
 所あるうらみ——別業の湯と掛く或日も故は振るおて  
 隣の花よみうらみ——随溪入碑のうらみとあ——わらうら  
 再菴菴よはるうらみ——まらぬまらぬけのり——多量の  
 けりぬきうらみ——日記をぬらうらみ入はるうらみ——  
 一の古くはるうらみ——まらぬまらぬけのり——多量の

昔年一四月の暮春伊賀の相雨みちのうらみ  
 祖翁の喜成のよきうらみ——義忠菴の喜成入世  
 圃——美しきうらみの古くはるうらみ——きれいな  
 けのく本津のうらみ——三益の山さくらしたと馬の上野の  
 所あるうらみ——別業の湯と掛く或日も故は振るおて  
 隣の花よみうらみ——随溪入碑のうらみとあ——わらうら  
 再菴菴よはるうらみ——まらぬまらぬけのり——多量の  
 けりぬきうらみ——日記をぬらうらみ入はるうらみ——  
 一の古くはるうらみ——まらぬまらぬけのり——多量の

鶯うの色序

湖南文豪丁風白集

けのく本津のうらみ——三益の山さくらしたと馬の上野の  
 所あるうらみ——別業の湯と掛く或日も故は振るおて  
 隣の花よみうらみ——随溪入碑のうらみとあ——わらうら  
 再菴菴よはるうらみ——まらぬまらぬけのり——多量の  
 けりぬきうらみ——日記をぬらうらみ入はるうらみ——  
 一の古くはるうらみ——まらぬまらぬけのり——多量の

乙州入掌あましむてその志はつきて狩は伴とおやましくし  
記しり正秀の宗匠の名ありてその家名は吹雪といふまはれ  
門人の中に小川行一才文といふは一時師老の名ありて  
たぐりのあに足方うもたまのわの父の名よふありて又  
しのき取て他とよぬてたよりい道こそはさしぬく或は  
志願入雲の櫻よのまはれまはき鳥の電う夜は被といふ  
一くかこま推致とあていし道と執りまはれゆきか  
そのはし世のまきこえ粟津の文素す他と一はひい人入  
りよもいれく雅見冠才入等わの文素をゆく家とて他  
儀りて身鳥の浮葉いづく菴よかかおらてのい

世のめい道けりぬて他もはしは入道いひまはれよは道は  
冠ははしと記しこはし余浪と居とありてはあぬ  
海もいれ世といり入眼も人をはしこまはしは地よ  
雅の鏡けしこはれいあまはれ又去年の種のみい  
あつた入はのい地もあつて

世のめい道けりぬて他もはしは入道いひまはれよは道は

時一も又あつて文素を人の

秋のあましむてその志はつきて狩は伴とおやましくし

記しり正秀の宗匠の名ありてその家名は吹雪といふまはれ

きよかたへんしの教せむいひのれも年々海入病の枕  
しきくまのまのりくもさしひの杖入るあねを  
一葉のまのりくもさしひの杖入るあねを  
そのまのりくもさしひの杖入るあねを  
秋の中へ海入るあねを  
あみも断片の懐やんかへん一葉は葉のりくもさしひの杖入るあねを  
まのりくもさしひの杖入るあねを  
写一葉のまのりくもさしひの杖入るあねを  
遺文を平軸くく金巻きよくもさしひの杖入るあねを  
年以ひくもさしひの杖入るあねを

門人のたれまのりくもさしひの杖入るあねを  
かき師の遺像と書今に残るの草葉のりくもさしひの杖入るあねを  
まのりくもさしひの杖入るあねを  
名もたれまのりくもさしひの杖入るあねを  
題もくもさしひの杖入るあねを  
一基の石碑は造立一足才入る名残きちくもさしひの杖入るあねを  
墮候の碑くもさしひの杖入るあねを  
香紙はくもさしひの杖入るあねを

鉢鼓集序

電光石火の世に於て、一日の間に、都の空を、  
物まじく夜人く、まの申川の底を、  
あやしく更けり、  
昔の面影、  
軍旅の中、  
今松を、  
何れも、  
あゝ、

うゝの法師、  
此の、  
かゝる、  
は、  
お、  
この、  
あ、  
あ、





うー海の山よ書とよ花の夢のーうれよ表とよ表とよ  
きーうり紙短きーて物短きーしすー

おのひしつゝの歌ーおの夜れまのま

と断腸の思ひよのさうなまや七年の今にまのぬま  
門人の海ふれおはまうて情書の紙端と短しー物よま  
ゆう花のまきまきまきーおのえまれのまのまのまのま  
まのいよと一集のまよまよのまのまのまのまのまのまのま  
哀猿まわらわら一集のまよまよのまのまのまのまのまのま  
ししやまもー今れおのまのまのまのまのまのまのまのま

直朝追悼集序

科の夜やーまーあまのまのまのまのまのまのまのまのま  
けりるまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
枕とおのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
人まよまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
おれ人まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
かた海のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
厭候のまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま  
まのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのまのま





衆議入趣をいへり紙をいへり

類題發句集序

草の菴せんまのいへり草のいへり人のいへり  
きりきりきりきりきりきりきりきりきり  
庭よまのまのまのまのまのまのまのまのまのまの  
りきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
ちきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
あきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
むきりきりきりきりきりきりきりきりきり

あきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
ちきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
あきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
むきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
あきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
むきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
あきりきりきりきりきりきりきりきりきり  
むきりきりきりきりきりきりきりきりきり

吉妻本草卷白集序

己世より十大才子とてやれぬは海遠く出さるる  
智恵第一の竹村通芳一河一のやうにわりの一と終  
わりの使のせきとておれぬ孔子の十哲とて叩一卒人の  
いさゝかひらゝたは徳行もや誰言語の誰とてくろ学の  
の一家のわりのれとて芭蕉翁の代雅の門人を其角の  
その白体とてあやよと支那の抄よ町坡を軽く出芳を  
わりの許ちをとて死ありは来の来よ支考のわきを  
きりてあし吉妻の評行りしとてさう好め白体の一節  
よりのわりの系のうとていひわいひとてあつちとていひ

蕉翁一人のぶよとてわりの白体とてわりのわりの  
きりてあし吉妻の十大才子孔子の十哲のきりてあつちとていひ  
その門人多く中よとて同子よ其角茂雪とて同西子の  
吉妻本草とて雅子雅兄入上足あつちとて其角茂雪の  
代雅をわりのわりの業とてわりのわりのわりのわりの  
あつちの流とてはあつちとて其角の五元集茂雪とて  
峰集あつちの家の集あつちとて世よはつちとてあつちとて  
蕉翁の直持のしりあつちとて代雅の名刺とてあつち  
いひわりのわりのわりのわりのわりのわりのわりのわりの  
一人のわりのわりのわりのわりのわりのわりのわりのわりの

人の身一ちの空くさくさくを道敷の正處へ骨髄を  
くまき平や〜山此二人の内海をきく〜  
善の善く花の〜指よちうた宛山〜  
む〜秋う〜栗津入浦の秋も月よう〜  
近くや東の番〜なうて國の造り〜  
か〜よ〜〜  
〜夜囊の底よ〜  
魯の二法師字〜  
〜  
〜

筆柿集序

石見島千法樂

古〜安永二年三月十八日石見のや高角山法座  
ま〜はの柿本明神千五百年の御喜よ〜  
はの柿本明神千五百年の御喜よ〜  
あ〜はの柿本明神千五百年の御喜よ〜  
は神と御喜よ〜  
ち〜はの柿本明神千五百年の御喜よ〜  
蕉門入内雅法〜  
〜  
これ海入り〜

多一さつたさの御宮よりあつたの草栞一しる栞の  
樹のその美かき御神のまゝつたつた草のあつたつた  
よつたつたつたつた神植一まづつたつたつたつた  
神法あつた一しる信言と娘小娘と詠の例をあらわ  
筆栞とあつたの題をあらわ一しる題をあらわ一しる  
案のあつたつたつたの集をあらわ草栞集一をあらわ  
あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
書し中書よつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
集よ筆成かつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
お懐もつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

つらつ杜多幻阿序も

道の枝折序

む一西行上人の白一音獲せつた一伴の伴縁を伴ひ  
あ一白雲思の獲つた秘蔵の言をあらわつた一おま  
あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
人よの道とつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
上人の法とつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた  
あつたつたつたつたつたつたつたつたつたつたつた

よつとていしはかたもよむとて道よいひのちつとていしはかたもよむとて  
此雅の道もよむとていしはかたもよむとて今わきよとていしはかたもよむとて  
字直もよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
よむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
あつとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
花つとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
老儒も年をいしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
とていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
あつとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
はくはれとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて

百題繪巻紙序

奥の墨江刺氏纂

むし京極黄門月並の花曼珠繪の巻をそれよ和奇を題ひ  
四季のなつとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
黄門よ小舎の山花入すると思ひまゝてやうけのゆ  
四時よ春風と秋風を、繪よまゝていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
あつとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて  
あつとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとていしはかたもよむとて

求むりて人その内雅の心はさや書て辨り  
きれりや三年後も経てて百題の終讀して其ぬれ  
ぬの色紙のありの物書し以て其のまじりて  
ホ紙傳く辨りて其のまじりて書て辨く

芭蕉翁集の集序

一の詩歌の心入初唐書を中唐の格調を  
一のやまひ歌とらば人古今後撰拾遺の  
内傳とせしむるを内雅の上古の心入

守武朝長宗禮入信よりも頭丸季の法印より  
まねたもまの句毎に言をまの心入内雅の心入  
まの心入内雅の心入内雅の心入内雅の心入  
内傳の心入内雅の心入内雅の心入内雅の心入  
ちうく内雅の心入内雅の心入内雅の心入内雅の心入  
まの心入内雅の心入内雅の心入内雅の心入  
まの心入内雅の心入内雅の心入内雅の心入  
及小文枕傳り傳妻ふ身内國の心入内雅の心入  
おの心入内雅の心入内雅の心入内雅の心入

遙く年経て元文うきぬ集雀しつる人う芭蕉句選  
題しつる書物うき人あつて句選よきものありし  
されどもこの書社撰うて他う句載ておる句は  
おのれをいふに支考の多り元文は丹  
田極の句とおのれをいふに支考の多り元文は丹  
おそむ世のうき人あつて句選よきものありし  
おやまのそらにありしものありしものありし  
よきものありしものありしものありしものありし  
衆う集あつたやまのそらにありしものありしものありし  
て檀板の異風とありしものありしものありしものありし

きり初学の人もおのれをいふに支考の多り元文は丹  
学のうき鄭ふしをいふに支考の多り元文は丹  
おのれをいふに支考の多り元文は丹  
きり初学の人もおのれをいふに支考の多り元文は丹  
俗諧に元文をいふに支考の多り元文は丹  
今より文を略すの趣をいふに支考の多り元文は丹  
一つの新作を起する炭俵猿蓑是あり又日猿子の  
集の翁も先づおのれをいふに支考の多り元文は丹  
さうおのれをいふに支考の多り元文は丹  
元文のうきものありしものありしものありしものありし



近來の吟ありや如く時分の新さとししはれい新入変化  
流行するや故きやうかこし癖のむあつとこしとせしり  
信りしとされし神と改まると今の體もあやめく血脈を  
わししとく流りしとまじし激さともくまよりのや  
先世よ未世の博くつきりも我不易の神とあひ  
固あつし今よりとくちて新うほとまじりし  
くは流りし動古の分別もまじりし悪た中ありしとやま  
いしとたあつしと一平年月そのむれ年曆とまじり  
流りしとまじりしとまじりしとまじりしとまじりしと  
まじりしとまじりしとまじりしとまじりしとまじりしと

りく博士と田行し一親凡老人の志極の東は神とあひ  
翁の門人杜若うあやして凡雅や翁の上は土芳の初才  
あり一夜写経の序より翁うむの年曆の東は神とあひ  
らし一曰翁を生後縁を極し一けりしとまじりしとまじり  
かこしれいも年々と外國と論りしと一とく兄の杜若氏の  
許よりやうりしと戸ありしと昔年とれ業をきりあつとら  
あししとけりしとありしと語りありしと成すく成す  
出芳ありしと字ししとく自昔のはとあつしと  
風く論りしと一とやとえ派七年終世のみよりのとや年  
馬路より記しと一と書りしとけりしと一とまじりしと

此の書は今日教員の人々の手中には昔を回す書  
本の書としてみられざるは誠に可哀なるに似たり  
ることよその道に随てわらう他は入門人もたははさ  
ゆいゆいとしていさげしと似たりたるをききゆ  
名刺の書にみえぬやけいへいといふこと土音ぬく  
致すこと書紙に十生雁九うりてかくてつう人も  
又もたうしうしうといふこと他見せうといふこと  
ゆいゆいなるに似たりといふこと又書にみえぬ  
一頁も遺り其由を三寸九分四方に菊文入縮表紙と

わき草翁文集の五巻の甲五枚の縮紙の二枚の別は  
蕉翁文集巻の細道入二冊あり一通三嘆といふこと  
年月衣妻の序又入巻首のりきり秘巻を三つれよ去年  
十月十一日の夜栗津の番に通報して妙楽の書と  
ゆいゆいといふこと八十年懐書入四巻といふこと  
世の愛欲といふ無りよ孤魚の餌といふこと其も  
かたの扱ふといふこと世人と今とをいふこと  
よーや鏡舌の罪やよ海といふこと母の人の迷といふこと  
下むりみきの切込あはれといふこと又昔趣といふこと  
半の肖像といふことかたの書といふこと細道文集の

白く如の余れは集ふ載きももまかへ翠桐ある男よ  
筆はしきり百々の羽濫又飾るものあり

蕉門俳諧抄録序

古人のいふ所の匹まありて百々の師といふ言天下の法  
ありて芭蕉翁の雅の法先さねよとてく没後百年来  
く如く俳諧の法体字の法ありていふものありて  
あは山の奥は岸なくともいふものありていふ  
潮も女もてと此翁の道はけいといふものありて  
世も宗耀と衆も世も秋の月もいふものありて人の善と

我もいふものありていふものありていふものありて  
世も世もいふものありていふものありていふものありて  
まれいふものありていふものありていふものありて  
世も世もいふものありていふものありていふものありて  
直指の旨もいふものありていふものありていふものありて  
いふものありていふものありていふものありていふものありて  
蕉門の法もいふものありていふものありていふものありて  
いふものありていふものありていふものありていふものありて  
邪説と我もいふものありていふものありていふものありて  
世も世もいふものありていふものありていふものありて



博覧自序も

非筆序

大和方は去探は成方の式より軍一しきり見たりし  
いり一連交うむ或中為相つりしるる新或中為藤原  
平二條及今あやや一車輝園の原とや詠詔の或を  
於臣のよる字體は所の大流は負徳も人うは筆を  
牛も行一棟りしるるねり一中やの筆は  
るくこれ道の或月一ちりてこの原は為人との書  
非筆一せしるるやあ一きりしるる筆の中は多く謬を

後世の学も不審きりしるる一室原の以相釋  
國籙念も下書集しりしるる好士のり以款ま  
伊筆一部の中は文を或の相違りしるる一筆同く  
りし書りしるる其書ありしるる或りしるる  
とこれ批言をりしるるはりしるるものりしるる  
然の指法籙りしるるはりしるる書りしるる  
一伊筆の書はりしるる路下の書其原田井上の後れ  
此書りしるる又りしるる中りしるるりしるる或の  
きりしるるりしるるりしるるりしるるりしるる  
偃武修文の原りしるる一書りしるるりしるるりしるる

あきらむ所の事、いふに、神皇正統の事、なほよて書

元澤牛母道の記序

るの記し、この事、ふ、字、を、恒、基、骨、を、え、は、く、ち、長、引、可、佛  
の、記、を、よ、し、よ、ま、な、ぬ、信、の、事、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
東、の、道、の、記、を、い、ふ、事、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
後、字、紙、の、書、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
世、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
葉、田、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
一、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、

一、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
葉、田、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
世、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
後、字、紙、の、書、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
東、の、道、の、記、を、い、ふ、事、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
の、記、を、よ、し、よ、ま、な、ぬ、信、の、事、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
るの記し、この事、ふ、字、を、恒、基、骨、を、え、は、く、ち、長、引、可、佛  
の、記、を、よ、し、よ、ま、な、ぬ、信、の、事、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
東、の、道、の、記、を、い、ふ、事、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
後、字、紙、の、書、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
世、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
葉、田、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、  
一、に、あ、り、し、中、に、あ、り、た、り、



三百餘次歌を集て卯より辰に遊はしむるべし 戊戌  
 卯の令らばしるべし 兼慶よの阿含の時をへし 冬口  
 瓢箪神々集を方等般若入のりあり 猿蓑岩傍の  
 集しやは毎旦樂の時の年上れ 残砌味あふもれ  
 さらつたのるれ 好士も蓮翁一代之内侍もあきより  
 厚きももつと五時の流りあり ともかひく入く  
 町あふし 一時の長侍もあはれし 心ゆたへし  
 此の陰のふくしむるさるる 思ふ心も蓮翁一代之  
 入りふかすまのちも 凡百の千余を  
 草庵入り物しんされゆく人よき心とて 心丸

あつちぢたにたにけいひいさ たりんらき  
 ありの今わ世の記集の現る 心ゆたへし 蓮翁一代之  
 忠持よまのり 後学のまきより 心ゆたへし 蓮翁一代之  
 衆分の門人よ 記ある他社も 志は骨とむらう 戯中  
 きれしとやの極よまのり 題字の他つとも 芭蕉  
 最悦社集し 名けく ありあり 安永五年の秋所 塚野  
 壇より 輝あきし 心ゆたへし 蓮翁一代之  
 て 自序

芭蕉翁八十回忌時雨會序

交世の時々の日 小祥大祥の時



十四年十一月廿二日  
あつては國極の思ふ言ふありきか  
祖師菩提祖師之縁七十年十月十二日難岐の浦に遷化  
一終の功を極むと云ふはゆるしとせしむるは安永二年  
今日今日八十年の相慶をりさめりては雅の流に  
浴しての道より人といふは懐き報する情あり  
あしやとて一年々德國の門人より告ぐとせしむ  
一岸の景きを造りては蒼蒼とせしむるは海  
國南の友にせしむる國に山よひるの碑とせしむる  
幻何なるにせしむる懐き報する情あり

あつたれり人の命は短しと云ふはたゞ  
いふもは長生人といふは海の社友今をいふは  
香島に伝ふ一懐き報の流にせしむるは報  
恩はあはれとせしむるは其角と枝尾との愛  
のせしむるは神七日の道より今をいふはたゞ  
うしろの命の終りも必ず思ひの祖師とせしむるは  
うつやちぢよの道にせしむるは支那の書高白  
とせしむるは書も書りてしむるは神中禮文とせしむるは  
書もしほるとせしむるは神ねとせしむるは祖師の流にせしむるは  
信情盛えしむるは神の流にせしむるは石とせしむる



予も亦成癖して後人よけ付くものありし  
ありと祖傳のあり移すはいし一院琴師の火うけ  
まゝく粟村舟の草のまゝとてはさしつゝの秋の或  
威史信留ありしものありしものありしものありし

芭蕉翁文集序

わが文章の編を以て書に文章を気取つてさし  
減つて主としてわが國に流傳のありし  
流傳の文章をさしつゝわが國に流傳のありし  
体格をけしつゝわが國に流傳のありし

道に流傳のありしものありしものありしものありし  
の流傳のありしものありしものありしものありし  
つゝの流傳のありしものありしものありしものありし  
流傳のありしものありしものありしものありしものありし  
挿能のありしものありしものありしものありしものありし  
つゝの流傳のありしものありしものありしものありしものありし  
積のありしものありしものありしものありしものありしものありし  
つゝの流傳のありしものありしものありしものありしものありし  
初よりつゝの流傳のありしものありしものありしものありしものありし  
いれありしものありしものありしものありしものありしものありし

あはけりよきむのうたまの成すみく 殿を九のよ  
ふくしきやせ年白 蓬翁桑白集 海階集 舟の家の  
集を編むた文集ありしこと 出芳うき蓬文選を  
毛一一し州の及小文史邦の古文庫許六の内保文選支  
考の文謚文探りたるの法書よ安んましむるに  
昔蓬翁文集の題一一三十九年板の五の蓬翁の  
たまう不行の巻も一一一の後のあまのけきし

名所小後序

今やすし 桑板可一のきよ行のゆかり 名所書流

えんれ癖ありし却るき一あしのかほりよ  
くくほり又種粟う痛疾しんあうく一  
星崎の里にのわたりきよあまのけきし  
りたれしその業を母の書は又蓬一一古今の  
人うのやあまのけきしあまのけきし  
あまのけきしあまのけきしあまのけきし  
ちりちり板のやのせりたれしあまのけきし  
せりちりししあまのけきしあまのけきし  
けきしちりしあまのけきしあまのけきし  
しあまのけきしあまのけきしあまのけきし





不死の薬とあるや井の中へ沈む所を祈る

ぬるひのまてかたけのきつをこゝろに

ゆめを寝てまへはふりきりては

いひまのまはりてはふりきりては

はつりてはふりきりてはふりきりては

典はふりきりてはふりきりては

あまのまはりてはふりきりては

いひまのまはりてはふりきりては

あまのまはりてはふりきりては

いひまのまはりてはふりきりては

いひまのまはりてはふりきりては  
あまのまはりてはふりきりては  
いひまのまはりてはふりきりては  
あまのまはりてはふりきりては

芭蕉翁百回忌序

一書政五年の年十日十二日  
あまのまはりてはふりきりては  
いひまのまはりてはふりきりては  
あまのまはりてはふりきりては  
いひまのまはりてはふりきりては





國くわんをのびるに交るれをくも向まれすの  
祥志るの年毎の時をきりしにあらはるるれも  
十のうら十二のうら別時う念佛念成のりる信よ  
赤念と付きし一車如婆と造建しと表れとて  
海をきりすのれもまたあゆみ成とてしるる年  
かの蕉菴初七日の枯尾急の風社と相續しとてし  
らるる百年の今日よのいしちの道う強きれり  
せししにちるるに蕉菴う病のうらあゆりて向  
あゆみ死うと事なすよすよのいし存るの御中書  
畑の向うのきりて是るる山は神島う孝又きりて是れ

佛の妄念しりしうあゆみはあゆりてのあゆしとてすの風  
社とてしと懺悔ありしにすのあゆりてのあゆりての  
あゆりてのあゆりてのあゆりてのあゆりてのあゆりての  
作師の凡俗ありしちの造祥とて惟し頻るやまき  
名利のあゆりてのあゆりてのあゆりてのあゆりての  
幻けは院佛梵香神書と

蕉菴百回忌集後序 筑前福岡五年為撰

其むうし一え録十三の芭蕉菴七年のあゆりてのあゆりての  
書の名集しりし書の撰集ありあゆりてのあゆりてのあゆりての

あ—又あつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
おのり長崎よあ—一西七つとて—香集のり—  
あせりしちやあつらるるしちあつちの申し—  
今巻のよあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
道徳よあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
法よあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
世よあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
傍あつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
ち西き後集のり長崎申後入肥田  
道あつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田

禪師もあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
れも後集のり長崎申後入肥田  
ら内とらあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
福をのり長崎申後入肥田  
あつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
いもあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
いもあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
の百回あつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
あつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田  
うもあつちりしつらりも絶ありの長崎申後入肥田

十巻の教よそこのりこの情あはつたふり様のよき  
了く要津の文庫を奉納せむして都よのりきりや  
美師の教よそこのりこの情あはつたふり様のよき

音長法師進悼和歌跋

古の十首の和歌の音長法師の四十九日よあはつた  
世の情あはつたふりこのりこの情あはつたふり  
あはつたふりこのりこのりこのりこのりこのり  
余は粟津桑和のりよそこのりこのりこのりこのり  
まやくのりこのりこのりこのりこのりこのり

はつたふりこのりこのりこのりこのりこのり  
や二條のりこのりこのりこのりこのりこのり  
坊く内外のりこのりこのりこのりこのりこのり  
音長法師のりこのりこのりこのりこのりこのり  
いこのりこのりこのりこのりこのりこのりこのり  
後醍醐のりこのりこのりこのりこのりこのりこのり  
交はつたふりこのりこのりこのりこのりこのり  
法成のりこのりこのりこのりこのりこのりこのり  
毛懐書のりこのりこのりこのりこのりこのり

鷹の羽の跋

備右受千造撰

昔の鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 種の間をぬき　すくなく　ゆく　すくなく　ゆく　すくなく　ゆく  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋

青幣白幣跋

筑前斗主撰

斗主むんちのせ　白幣跋入る青幣白幣の御神  
 代ののり　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋  
 鷹の羽の跋　やうやくも今の入る鷹の羽の跋

一終



菅菰抄跋

越前丸岡梨一撰

菅菰抄のてきく後子の奥の物とてよまひしと思ひ  
わり不讀美老書不行千里區無解ガ後詩と書も  
奥の細道のれくぬつらぬしー入やまゝのあれ牛  
馬のつらふも入るまやまゝのき味の深長ある  
草かむむ入るも踏やあゆむるたさうれははるの  
けしやふも此處よりとよまゝ奉るははるの  
はやりのたれた記をえりて圖書のみよりよれ得る  
さしはるのつらふもあつてまゝのまゝのつらふ  
あつてのつらふもあつてのつらふのつらふのつらふ人

あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ

新雜誌集跋

洛儿董撰

新雜誌集として新雜誌の行の雜誌を初め  
清浦の雜誌の連載の雜誌の行の雜誌を初め  
其角の雜誌の連載の雜誌の行の雜誌を初め  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ  
あつていつて細道のつらふもあつてのつらふのつらふ

むく日毛うさしにむあすれしてうらも  
孫のよみてお清もあつてあれ西歌までまねて  
いふあつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて

年改草跋

この年改むるにむあつていふあつていふあつて  
いふあつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて

あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて

鷄三集跋

か賀麦水探

あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて  
あつていふあつていふあつていふあつて

野原にいつては又びりあつたよ  
 うれとあつた秋や史料の  
 目よ目よとらまじ  
 下のよまじし書は猶をう  
 家までらる書ん

奥の神を記す書

片のる金う家よはりし  
 奥の神を板りし事よ  
 記す  
 記すれよ今年のを伊賀  
 の上命よ抄写のわ  
 古よ及古の中よ此神道  
 の原をとりしりえん  
 記す  
 記すまの信來の因縁  
 とまきまの記す

ひしきりくわしし  
 記すの記す

手鑑る裏書

芭蕉翁遷化ありし  
 俗信の正法を  
 九十九の言秋を  
 恒ねしれい今の世を  
 此の法  
 う信ありしや  
 しし世の門人の  
 記す  
 人しりしきり  
 世よやまの  
 記す  
 記す  
 思し人ありし  
 何れもまの  
 記す  
 記す



伊賀の國藤堂為とほしち選龍と埋ちる也  
はのふ伊賀に尾張より移入りけりちりちりむしちの  
武苑神くちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
二年寅十日時雨會る日 蝶美幻ちりは位佛謹記

二見文皇の書

此二見文皇をいひし西の上人伊賀の二見の備  
ちりちり神明法樂の初奇法録しち道ちりちりちり  
ちり西の河村の越えちり上人の史記をきりちり  
ちり藤原の地好ちりちり板を櫻の本ちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちり甲子ちりちり一卷しちりちり  
後後ちりちりちりちり信濃の諏訪の位人の史井  
相傳ちりちりちりちり國岐蘇の櫻門の政長と櫻門時  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
ちりちりちりちりちりちりちりちりちりちりちり  
宅原の末甲の神宮先きに訪りちりちりちりちりちり

草考の付物とあり、又近頃の國お分よりの位為の  
旧法も、推のちわつと、いふも、さきさきの、  
き、ちよまの、む、ち、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、さ、  
開國の、お、お、お、お、お、お、お、お、お、お、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、れ、  
は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、は、

その他、歌、文、巻、入、裏、書、

ち、の、又、巻、の、裏、入、物、さ、よ、り、の、よ、り、表、の、傍、と、い、れ、い

い、み、入、の、昔、進、為、う、ち、代、の、國、と、い、ふ、ま、の、お、の、い、れ、  
を、も、り、お、は、け、う、ま、り、お、お、お、お、お、お、お、お、  
古、跡、と、い、ふ、界、の、海、の、つ、り、ち、う、て、進、お、の、ま、の、い、れ、  
ち、は、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
人、と、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、  
あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
と、や、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、  
其、國、の、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、い、れ、  
さ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、

此道入調發去れよ  
す他入あやふか  
なまはな  
か

